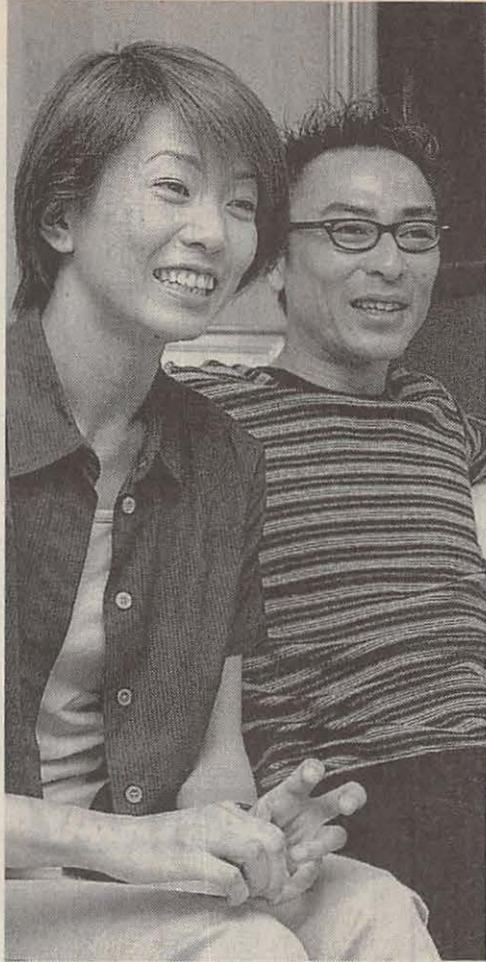


ダンス公演「ミレニアム・ガラ」

ダンス公演「ミレニアム・ガラ」が八日と九日の両日、東京・渋谷のBunkamuraオーチャードホールで上演される。吉田都(英国ロイヤルバレエ団プリンシパル)、佐々木想美(牧阿佐美バレエ団)と写真左と上野水香(同)、下村由理恵(スコティッシュバレエ団パーマネント・ゲストプリンシパル)、中村かおり(パシフィック・ノースウェストバレエ団プリンシパル)ら、日本を代表するトップダンサーたちがクラシックとモダンの両作品を踊る意欲的な公演だ。演出の島崎徹一(同右、クラシックだけでなくモダンの評価も高い佐々木に聞いた。(田窪接子)

トップダンサーが舞う クラシックとモダン

島崎は「何をもちってクラシック、モダンとジャンル分けするかは難しいですが、今回はクラシックバレエで知られたダンサーが、クラシックより後期の作品にも挑戦するという感じでしょうか。日本でもクラシックとモダンと分けたりせず、ダンスというひとつのくりで踊られるようになってほしい。今回はそこへの第一歩でもあります」と言う。



佐々木はクラハム・マケルビーと新作「これぞうな時」(島崎振付)を踊る。元クライズラー&カンパニーの斉藤恒芳が作曲し、ピアノとパーカッションの生演奏で上演される。

「ガラス細工のように、何か本当に小さなことですべてが壊れていってしまうようなイメージを、ロマンチックに表現しようと思っています。音楽家、ダンサーらとの合宿で作ります」と島崎。

「六月に出演したコンテンポラリーダンスの『キングリア』は、振り付けが上田遥さん、音楽が東儀秀樹さんで、初めての出会いばかり。最初は戸惑ったけれど新しい経験、発見があって刺激的でした。振付家とダンサーの信頼関係をつくるのが難しいけれど、人と人との関係から作品が生まれるので、楽しみです」と佐々木。

八日は上野と森田健太郎が「シヤプリエ・ダンス」と「白鳥の湖」、下村と佐々木大が「海賊」(ドラマ)、佐々木想美と正木亮羽が「ジゼル」、吉田都とイナキ・ウルセラーが「ロメオとジュリエット」を踊る。九日は中村と

「ハイレグジーザス」の河原雅彦



「トランス」に出演

異色の顔合わせに注目

オリビエ・ウエヴァースが「スターズ&ストライプス」と「エスマラルダ」で登場。話題作が吉田とウルセラーが、ロイヤルバレエ団に留学中の注目の若手、蔵健太によるシミ・ヘンドリックス作品。ほかにも吉田、中村、下村らによる「ドン・キホーテ」と盛りだくさんだ。

島崎は「今回は第一歩ですが、大きな枠組みの中でそれぞれ

に踊りたい作品を選んでもらって、いろいろなダンサー、振付家がいる中、クラシックバレエという大きな木からどう枝分かれするか。今後はアプローチの仕方はどう変わるのだろうか。今後はアプローチの仕方はどう変わるのだろうか。今後はアプローチの仕方はどう変わるのだろうか。

問い合わせは公演事務局03・5500・8262。

若者に人気上昇中のハイレグジーザスを主宰する河原雅彦「写真」が「トランス」(鴻上尚史作、木野花演出)に出演する。ともさかりえ、山崎銀之丞、河原と異色の顔合わせが注目の舞台だ。

河原は出演を決めた理由を「客観的に見て、自分をプロデュースする感覚」と説明。ハイレグジーザスは小劇場を中心に活躍しているが、「それに比べて今回は商業演劇じゃないですか。劇場も大きくなり、臨場感なども違うでしょう。うまく演じられるかどうかは考えず、企画として面白そうと出演を決めました」と話す。

「トランス」は平成五年と七年に鴻上演出で、十年には自転車キ

り込まれていく構図だ。「結局、アイデンティティーの話ですから、やっぱり演じるのは大変。ぼくの役は、力技でゴロツと変わるようなポピュラーな演じ方がやりやすいのだからうけれど、自由にやります。ある生っぽさを要求される芝居なので、うまくできなくておろおろしているのも面白いです」と言う。

脚本、演出、俳優のほか、豊富にロック音楽の知識を生かし舞台やライブの選曲、DJなども行っている。今年三十一歳の河原は「三十歳ぐらいになると普通、やりたいことを見つけ、絞り込んでいくけれど、自分は逆。いろんなバランスの中で改めて何でもやりたいと思う。何をやってほしいか

あることは変わらないから」とマペースだ。

十三日まで、東京・銀座のル・テアトル銀座で。広島、福岡、大阪、名古屋公演あり。問い合わせはR・U・P03・3372・6262。

モビール音楽賞決まる

日本の音楽文化の発展向上に貢献した個人、団体を表彰する目的で昭和四十八年に創立されたモビール音楽賞の第三十回選考委員会がこのほど開かれ、邦楽部門に長唄三味線方の田島佳子、洋楽部門に本賞に大阪音楽大学サ・カレッジ・オペラハウス、同奨励賞にピアノの横山幸雄が選ばれた。贈呈式は十一月二十八日、東京都港区のアルトに合わせたヴィオラ・ダ・ガンバのソロ演奏とそれを引き立てる通奏低音(チェロとオルガ

今年J・S・バッハの没後二百五十年ということで、わが国でも世界各地でも、バッハが改めて脚光を浴びている。そうしたなかで、気鋭のバッハ探求者、鈴木雅明の指揮・演奏が本場のヨーロッパでも注目されているが、この夜のバッハ・コレギウム・ジャパンとの「ヨハネ受難曲」(一七四九年版)は、実に見事な出来栄であった。

私自身、これまでバッハを聴き、また自分でも弾いてきたけれど、それは主に、厳格な律動とハーモニーに惹(ひ)かれる管弦楽曲であり、バッハのもつ宗教性をむしろ避けてきた。そのようなバッハへの接近の仕方が根柢から覆えられたような気がする。この年齢になって、ようやく本当のバッハに開眼した思いであった。語り部としての福音書記者ゲルト・テュルクの潤んだ美声が古楽器の満洒(じょうしゃ)な管弦楽と調和する聖句の演奏(レチタティーヴォ)、ボーイ・ソプラノのヴァイオリンや木管の古楽器と協

ホテルオークラで行われる。田島は母校の東京芸大音楽学部で四十年にわたり助手、講師、客員教授を歴任、長唄の教育、指導に尽力、多くの人材を育成した。大阪音大サ・カレッジ・オペラハウスは専属の管弦楽団、合唱団、歌手陣を擁するわが国唯一の欧米型オペラハウスとして、黛敏郎の「金閣寺」関西初演の他、ワイル「三文オペラ」、プリテン「アルバート・ヘリング」、ダララピツ「コラ・囚われ人」夜間飛行」といった現代オペラの上演などで広い支持を受けている。また、横山はショパン、ベートーベンの全曲演奏を中心とした幅広いレパートリーに取り組み姿勢や豊かな音楽性が評価された。

鈴木雅明の指揮しながらのチェンバロも圧巻であったが、イエス・キリストの受難の場面をつづつた教会音楽を、演奏会場の舞台で音楽そのものとして美しく明るく、時には軽やかにさえ表現することによって、総体としてのバッハの音楽的奥行きと荘厳さが強く示し出されていたように思う。私はこの夜の演奏を聴いて、コラーや合唱の妙ばかりか、さまざまに楽器を取り合わせるバッハの音楽的な面白さを再発見した。キリスト教徒ではない私にはかなえられないことであろうが、会場で買求めたCD(BIS・C D1921/922)を家に帰って聴き返しながら、自分が葬送されるときには、この「ヨハネ受難曲」第三十九番の「合唱」であってほしいとさえ思ったほどである。

(なかじま・みねお)東京外国大学長

中嶋嶺雄が聴く



鈴木雅明&バッハ・コレギウム・ジャパン
(7月28日 東京・赤坂 サントリーホール)